グレアム・グリーン全集

23

ある種の人生

——自伝 I——

田中西二郎
訳

・グリーン全集

23

ある種の人生

――自伝Ⅰ――

田中西二郎
訳

早川書房

A SORT OF LIFE

by Graham Greene
Copyright © 1971 by Graham Greene
Translated by Seijiro Tanaka
Published 1982 in Japan by
Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan by arrangement
with Laurence Pollinger Limited through
Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo.

グレアム・グリーン全集 23

〈検印廃止〉

ある種の人生 ―自伝I―

著者　グレアム・グリーン
訳者　田中西二郎
発行者　早川　清
発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町二ノ二
郵便番号　一〇一
電話番号　東京(〇三)二五四―一五五一(代)
振替番号　東京・六―四七七九九

印刷　中央精版印刷株式会社
製本　中央精版印刷株式会社
発行日　昭和五十七年五月十五日
初版発行
定価　一二〇〇円

乱丁・落丁はお取替えいたします　〇三―九二〇〇―六四〇一

ある種の人生

―自伝Ⅰ―

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

生き残った
兄、レイモンド・グリーン
弟、ヒュー・グリーン
妹、エリザベス・デニス
のために

むかし居た土地にけっして帰ってはいけない
とは、盗賊とジプシイだけが言う言葉である。

――キェルケゴール

自叙伝というものはいわば〝一種の伝記（ア・ソート・オブ・ライフ）〟に過ぎない――伝記よりは事実の誤りは少いかも知れぬが、事実の取捨は必然的に一層はげしくなる。自叙伝は晩く始まって、時が熟さぬうちに終るのである。ひとつは死の床で回想録を閉じることができるとするならば、どのような結末も恣意的なものとならざるをえないのであって、そこでわたしはこのエッセイを、わたしの小説の第一作が出版社に採用されたあと数年間つづいた失敗の時代で終ることとした。失敗もまた一種の死である――家具は売られ、抽斗はからにされ、引越トラックは霊柩車のようにひとを前よりも家賃のやすい住居へ連れてゆこうと表に待っている。また別の意味でも本書のような本は〝一種の伝記〟となるほかはない、というのは六十六年間の人生行路で、わたしは実在の男たちや女たちに対するのとほとんど同じくらい多くの時間を、想像上の人物たちとともに過ごして来た。実のところ、わたしは多くの友人に恵まれて幸運であったけれども、名誉不名誉いずれにしてもただ一つの逸話も思いだせない――わたしが微かに憶えている話はみな自分の書いた話ばかりである。

ところでこうした過去の断片を記録した動機は？　それはわたしが小説家になった動機とあらまし同じである。渾沌たる経験内容にある種の秩序をもたらしたいという欲求、それにもの欲しい好奇心。神学者たちの教えによれば、われわれはある程度われわれ自身を愛し得ない限り、他人を愛することはできないというし、また好奇心

もまずわが家で起こるのである。

今日、わたしの同時代人の多くは、おのれの過去の出来事を皮肉にとりあつかう、それがかれらのあいだの流行になっている。それが自己弁護の公認された一方法なのだ。「わたしが若かった頃はどんなに愚劣だったかを見たまえ」と言えば、苛酷な批評をあらかじめ予防することになるのだが、これは歴史を曲げるものである。わたしたちは〝卓越したジョージ朝人〟ではなかった。わたしたちが感じたさまざまの情動はそれを感じたときは真実であった。なぜわたしたちは老年の無関心よりもそれらの情動を恥じねばならぬのか？　わたしは遠い昔の愚行や感傷や誇張を再び生きよう、皮肉をまじえずに、当時それらについて感じたままに再び感じよう――たとい不成功に終ったにしても、わたしはそれを本書でこころみたのである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

第一章

1

もしわたしがはじめから予想していたとすれば、わたしの未来のすべてはいつもあのバーカムステッドの街々に潜在していたに違いないのだ。本通り（ハイ・ストリート）は多くの町の市場のある広場と同じくらいの幅があったが、その広びろとした立派さは第一次大戦後、緑色のムーア様式の円屋根を頂いた映画館〝ニュー・シネマ〟のおかげでだいぶ格が落ちた。映画館としてもちっぽけなものだったが、当時のわたしたちには結構ぜいたく気取りの、いかがわしい趣味がのさばっているように思えたものだ。わたしの父は、その頃バーカムステッド・スクールの校長になっていたが、あるとき一度、最初の『ターザン』映画の特別興行に上級生たちの行くことを許可した。それが人類学的興味のある教育映画だと誤認したためだったが、それ以来父は映画というものに幻滅と猜疑の念をいだくようになった。本通りのわが家に近いところには木骨造りのチューダー式の写真館（ショウ・ウィンドウには、土地の人々の婚礼などで揃えた顔が、品評会の牡牛たちみたいに花環に飾られたとまどった顔を並べていた）、大きな薄黒い石造りの、ノルマン式の教会などがあった。教会の柱の一つには誰か昔のコーンウォール公爵の兜が掛けてあったが、玄関（ホール）に残された山高帽みたいに人目につかなかった。道路の下にはグランド・ジャンクション運河がよこたわって、派手な色のハシケがのろのろと動き、わたしたちとは縁のないジプシイの子供たちの姿がみえた。オランダがらし（ウォークレス）の草野、オランダぜりの生えはびこる空濠（からぼり）に囲まれた古城の小丘も見わたせる（城はチョーサーが建てたといわれているもので、ヘンリ三世王の世にフランス軍に攻囲されて占領されたことで知られている）。鉄道線路のほうからはほのかに炭塵の好ましい臭いが風に乗って来る。そしていたるところにさまざまの、それぞれに特色のあるバーカムステッドびとたちの顔があった――わたしはいまでも世界のどこにいてもかれらの顔がわかるような気がしている。眼もとのあたりに小ずるさのある、狡猾だがあまりうまく人をだませない顔、トランプ

カードのジャックのように顎のとがった顔だ。

さてその次に、あまり気は進まないがわたしの個人的地図には抜かせないものとして残っているのが〝学校〟である――一部はバラ色のチューダー式、一部はみにくい近代式の煉瓦づくりで色は人形の家の練りもののハムの色――人生のみじめさが始まったのがここだ。それから長いこと使われぬままの墓地、これはわたしたちの家の窓の向うにあって、わが家の花壇と見えざる一線で画されていたから、毎年庭師が花壇の縁を手入れするたびに人骨が幾片か掘り出された。さらに北へ行くと、アフリカのように空虚な地図の緑の空間に、アシュリッジ・パークまで伸びている厖大な公有地、ハリエニシダとワラビの荒地がよこたわっているし、南には小さなブリックヒルの公有地とアシュリンズの公園があり、この公園で一度わたしは春の木の葉で蔽われた〝青葉のジャック〟（五月一日のメイ・デイに青葉で蔽った木枠の枠のなかに男が入っている見世物）が従者たちのまんなかでしつこく踊りまわるのを見たことがある――後年リベリアで見かけた〝悪魔〟たちとそれは似ていた。

よきにつけ悪しきにつけ、自分の未来となるべきあらゆるものがそこにあったにちがいない。人の未来は家の形状からも手相からと同様に予言できるだろう。さまざまの場合の回避とか欺瞞とかは、その地元の住人たちのずるい顔や、庭だの公有地だの生垣だのの隠れんぼの場所からも形をとった。ここバーカムステッドにこそ最初の原型があり、その原型からものごとは無限に再生させられることになった。二十年間というもの、それは幸福、悲惨、初恋、ものを書く企てなどのほとんど唯一の舞台になったわけで、だからわたしは、もしも、暗合のはたらきにより、行動の無意識の源泉を通じ、愚かしさあるいは賢さにより、一切のものが生まれたこの土地へ死にに帰ってゆくことにならないとしたら不思議だ、とそんな気がするのである。

長い本通りの向うのはずれには、ノースチャーチの村と〝曲り株〟という古い宿屋があった。この宿屋の名は、たぶんそこで起こった何かの事件のため、大人たちが子供の前で真相を包みかくして話しあっていたことから、わたしの心には何か曖昧な印象を残していたが、そんなことでわたしにはいつもこの名が不吉な感じをともない（この宿屋できっと旅人たちが非業の死をとげるようなことがあったに違いないとわたしは思っていた）、そしてこのためにノースチャーチの村ぜんたいが世間を狭くしているような―

—そこでは悪夢のまぼろしがいつでも現実になりかねない物騒な土地という——雰囲気を感じさせた。わたしたちはあそこへは決して散歩に連れていってもらえなかった——もっともそれにはごく自然な説明ができないわけでもなかった、というのは乳母たちにとって、二マイルの本通りを、市役所のホールを過ぎ、新造のキングズ・ロード——ここは一日に二度、通勤者たちが小さなアタッシェ・ケースをたずさえてぞろぞろと上り下りする——を過ぎ、子供たちがかならず足を止めたがるミセス・フィッグの玩具店を過ぎ、歯医者の薄気味わるいステンド・グラスの窓を過ぎ、市場のための菜園にそって、いたるところ石炭置場や石炭を積んだハシケから風に乗ってくる妙に埃っぽい臭いのするところを歩くのはとても我慢がならないというのは、無理もない話ではないか？

ほかにもわが家の年老いた、気まぐれ者の乳母や子守女の厄介になっていた頃のわたしたちが決してつれて行ってもらえない散歩道があって、それは運河ぞいの、曳船を曳く小道の散歩であった。もしも〝曲り株〟をめぐってわたしの心に不吉な雰囲気があったとすれば、直接の危険感は運河によってもたらされた——炭坑夫のように黒くなった顔の異様で獣めいた運河労働者たち、それに連れそう渡りものの女房たちやボロをまとった子供たち、かれらが服装もととのった附添人つきの中産階級の子供たちを見て吐きかける侮辱的な言葉の脅威、かてて加えて、溺死の危険もあることをわたしなどは信じていた。新聞《バーカムステッド・ガゼット・アンド・ヘメル・ヘムステッド・オブザーヴァー》紙には定期的に運河で発見された溺死者の検屍審問の報告が載っていた。ハシケ乗りの子供たちの死者の数は多いといわれており、堰のなかへ落ちた者はとても助からないという話は、堰のどの番小屋の壁にもかかっている救命帯からのわたしたちの想像と矛盾するものではなかった。今日でもわたしは堰の切り立った濡れた壁を戦慄感をおぼえずに覗きこむことができないし、わたしの少年時代の夢の多くは溺れて死ぬ夢、水縁へ向って磁力のような力で引き寄せられる夢であった。（思春期にはこれらの夢の力があまり強くなったため、それらはわたしの昼の生活にも影響し、ちょうど速力の速い車が、それさえなければ空虚な路上で歩行者を催眠状態にさせる力をもつように、池とか河とかの縁がわたしの足を惹き寄せることがよくあった）

2

わたしの最初の記憶は、丘の頂きで乳母車に坐っていて、その自分の足もとに死んだ犬が一匹、ねているところである。そこは、後年わたしの富裕なエドワード叔父――何かわからない理由で通称〝エッピィ〟と呼ばれていた――の寄附によってバーカムステッド・スクールの運動場になった、その野原の近くであった。小さな町の地理ではあるが、グリーンを名乗る二つの大きな家族の影響を受けたわけである（一つの小さな土地に十七人のグリーンが居住していたのは今日でも人口の格別に高い割合と思われるだろうし、休暇時にはグリーン家の者は百人の四分の一に近くなることがあった）。犬は、わたしの姉の飼っていた狆だったことがいまのわたしにはわかっている。この狆が――馬車にでも?――轢き殺され、乳母は死体をこうして運ぶのが好都合と考えたのである。この記憶が真実のものだったらしく思えるのは、母が、その数カ月後にわたしが〝かわいそうな犬〟について何かをしゃべったので大変におどろいたとわたしに話したことがあるからである。それはわたしが話したほとんど最初の言葉であったのだ。

こうした幼少時代を通じて、わたしがほんとうに記憶していることは何か、確実なことは言えない。たとえばわたしは一つの玩具の自動車を憶えているように思うのだが、それはいまならば――一九〇八年売り出しの玩具ということで――サザビィの骨董店で売りものになる値打があるかも知れないのだが、しかしその玩具はわたしと兄のレイモンドとが映っている写真のなかに出て来るので、これはほんとうの記憶ではないかも知れない。そのときわたしはほぼ四歳で、前掛（ピナフォア）を着け、頸のまわりに金髪の縮れ毛を垂らしている。兄はちゃんとした男の子の髪型で、もう七歳の男児であり、後年カメットやエヴェレストに登る登山家らしく少しも怖れずにボックス・カメラをみつめているが、わたしのほうはまだ男女の性がはっきりしない曖昧さを残している。

わたしたち子供はお茶のあとの五時半から六時半までの一時間、階下の応接間へ行って母と遊ぶきまりになっていて、母がわたしたちに読んでくれたお話に感じた怖ろしさをわたしは記憶している。それは悪い叔父に森のなかへ行

かされ、殺されそうになった子供たちの話で、だが人殺しの男は後悔して、子供たちが野ざらしになって死ぬにまかせると、後になって小鳥たちがかれらの死体を木の葉で蔽った、というのである。この話をわたしが厭がったのは、泣くのがいやだったからである。わたしは子供たちの最期が長くひきのばされる哀感よりもさっさと殺されるほうがどのくらい好いと思ったかわからない。子供の頃のわたしの涙腺は――いや実はその後も多年にわたって、きわめて容易に活動する傾向があり、今日でもわたしは映画を見て、ハッピィ・エンドの場合など、その幸福が信じられないために心を動かされ、恥かしくて逃げだすことがときどきある。（人生はあんなものではない、ああいう勇気だの、こういう貞節だのをわれわれは夢にみるだけである。だがわたしは悲しみのなかでそれらの勇気や貞節が真実であればと思うのだ）

学齢に近づくにつれて思い出は濃くなる。一つの鮮明な記憶（わたしはたぶん五歳ぐらいだった）は乳母と一緒にグランド・ジャンクション運河の近くの旧い救貧院――棟と棟とがたがいにもたれかかりあっている――のわきを通ったときのことだ。小さな家々の一軒に人だかりがしていて、一人の男が群を飛びだし、家のなかへ駈けこんだ。その男は咽喉を掻き切ろうとしているのだとわたしは教えられた。誰も彼のあとを追わなかった――乳母やわたしを含めてみんなが外に立って、待っていた。だが彼が目的を達したかどうか、わたしはついに知ることがなかった。バーカムステッド・ガゼット紙には報道されたのだろうが、わたしにはまだ読めなかった。(原註)

（原註）たぶんここには記憶の脱落があり、その理由も理解できぬことはない、というのは兄のレイモンドがわたしに手紙をよこしている――「きみは実際に男が二階の窓際に立って咽喉を掻き切るのを見たはずだが、あるいは乳母がきみに見せないように遮ったのかも知れない。いずれにしても彼は目的を達した」

わたしの最初の六カ年間を通じて、このようなとりとめのない思い出があるだけなので、わたしには時間の連鎖が確かでない。それらの思い出は残っているということでわたしには重要である。物語が無意識の世界へふたたび沈みこんでしまったあとで夢にあらわれるバラバラな、迷子のような形象(シンボル)、ちょうど船が難破したときの生き残りのように、それらの記憶は救いを求めて泣き叫んでいる。

ごく薄味の、純粋に甘さのない特別な種類の小麦ビスケットがあった――いまわたしは聖餐式の祭餅（ホースト）を思いだすのだが――それは母だけが食べる権利のある品物だった。それは母の寝室の特別なビスケット罐にしまってあり、ときたまお情けに一片もらってミルクにひたして食べたものだ。わたしには母というと遠いものという観念が結びつくが、それをわたしは別に少しも怨んではいなかった。もう一つ連想されるのはオー・ド・コローニュの香りである。もし母の味をみることができたとすれば、それは小麦ビスケットの味がしたことだろう。彼女は折にふれて校長公舎（スクール・ハウス）の子供部屋を公式訪問した。子供部屋は例の石造の教会とさびれた墓地とに面した大きな、ごたごたした部屋で、いくつかの玩具戸棚に本棚、大きな意地の悪い眼をした揺り木馬が一頭、それに鉄のストーヴ囲いの隣りには乳母が使う大きな坐り心地のよい籐椅子があった。そして母がわたしの眼にすばらしい威厳があるように感じたのはリネン戸棚を監督していたからで、ここには怖ろしい魔女がひそんでいるわけだったが、その話は後にしよう。小麦ビスケットはわたしにとって母の冷やかなピューリタン風の美しさのシンボルだった――彼女はあるゆる混乱をとりのぞく人、悪から善を識別し善をえらぶ人だと思われた――ただし後年には自分の家族に関する場合には彼女は善だけしか認めなかったが。もしわたしたちのうちの誰かが殺人を犯したら、彼女はかならずや被害者の責任にしただろうとわたしは信じる。彼女が死の前の苦しみのない昏睡に陥って、わたしが側で看とっていたとき、彼女の白いプランタジネット風の顔は墓の上の十字軍戦士を想わせた。かつて家族アルバムで見た、長身でおとなしやかな美貌の女性が、長いスカート、ベルトをした細い腰、麦藁帽をかぶり、平底船のなかに立った姿――わたしにはあの女性にまことにふさわしいやすらかな臨終だと思えた。

その頃の不愉快な思い出の一つは血でいっぱいになった錫の室内便器のそれだ。わたしはアデノイドの摘出をすると同時に扁桃腺を切除した直後で、ひどく気分がわるかったのである。この手術は家で行われた。その後三十年間、血を見るとせつなくなり胸がむかむかして、そのためにときにはわたしは何かの事故の様子を話して聴かされるだけで失神したものだ。大戦中の電撃空襲で、最初の負傷者に出会う前、わたしは自分がどんな反応を起こすか不安だったが、いざとなってみると恐怖心と行動の必要とが眩暈に

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo